

# Impairmentを見極め、Disabilityへの適切な支援を

— ADHD児の育ちを支える —

七 木 田 方 美

母胎というざわめきの中で育った人間は、生まれてきたときはみな、感覚の過敏さや鈍麻さを持っているのかもしれない。生まれてからしばらくの間、保育器の中で育たなければならなかった赤ん坊の発達障がいリスクが高くなることから想像できよう。ひとは最初の数年のあいだに、大人にお世話をされたり、遊びの中で言葉を獲得したりするうちに、個々の感覚の過敏さや鈍麻さは生き抜くためにちょうどいいように調制（調整ではなく）されていく。

例えば味覚。生まれてすぐの赤ちゃんに味蕾細胞が大人の2～3倍あって、旨みや母乳の甘みが分かっていたが、大人になるにつれ、さらに広い味を味わえるようになる。また嗅覚は、生まれてすぐの赤ちゃんが、羊水と近似した匂いの構造をもつ乳輪からの匂いを嗅ぎつけて自ら乳房にたどりつき、母乳を含むうちに個々の母親の匂いを一番好むようになってゆく嗅覚選好などにみられる「調制」が挙げられる。さらに、2歳ごろから急激に目立つようになる心の発達からも、「調制」の様相が想像できよう。

ところが、先天的に、または後天的な様々な要因が重なって、生活するのにちょうどいい具合に感覚が調整されない子どもたちに、対人関係の問題、言語・コミュニケーションの問題、想像力の障がいという、社会生活における特異性や、過度な不注意や落ち着きのなさなどに着目した診断がなされて久しい。障がいの原因は脳機能の問題であるとし、脳は可変的な粘土ではなく、あたかも石膏のような硬さのある脳の可塑性がうたわれた。そして私たちは「視覚優位」であり「聴覚過敏」であることに配慮した

療育方法に関心を持った。

しかし、その方法を理解しても納得のできない実践家は私を含めて多くいたはずだ。特に「視覚優位」という言葉に、である。「聴覚過敏」「接触過敏」「味覚過敏」と感覚の過敏さが続く中、視覚だけがなぜ「優位」なのか。むしろ、すべての感覚の鋭さや鈍麻さに着目すべきではなかろうか。

障がいは、Impairment（機能・形態障がい）とDisability（能力障がい）の二階建ての構造をもっている。Impairmentを、私たちは完全にわかりきることはできないが、違い（disability）を作りだす違い（Impairment）がわかったとき、否定ではなく工夫がうまれる。「診断」とは本来はImpairmentの見極めであり、「支援」とはdisabilityという生き辛さを想像して工夫することであるはずだ。

本稿では、最初にADHDのImpairmentとdisabilityの違いを解明し、キッズサポートシステムKissでの保護者との対話や、広島市の巡回相談指導にて得た事例を総合的に考察し、著者が気づいたADHDの育ちの構造を述べる。

## 1. ADHDの障がいの構造

### （1）Impairmentは脳の実行機能の偏り

ADHDのImpairmentは脳の機能障害というブラックボックス説明がなされている。Impairmentは明確には分からないということになる。診断基準を眺めてみると、すべてImpairmentではなく、Disability視点での基準となっていることからImpairmentの不明さが推測できる。

したがって、ADHDのImpairmentは、脳の

実行機能の偏りという論説が適切であると考えられる。実行機能とは、感覚器から入力された情報を、何らかの形で反応するに至るまでに使う脳の処理過程である。処理過程は一つの刺激に無数の反応が想定できるが、ADHDは、得意とする入力過程、処理過程があるため、衝動的であったり不注意な行動をとってしまったりすると考えるのが適切であろう。

ADHD児の脳の実行機能を登山に例えるとわかりやすい。山の頂上に到達する登山口とルートが複数あるにもかかわらず、悪天候でも、どの季節でも、同じ一番近い場所の手慣れたルートを通して、ぬかるみにはまって足を捻挫したり、新しい景色に出会えなかったりするようなものである。

## (2) ADHDと合併症

ADHDの子どもの3割から6割が、ODD (Oppositional Defiant Disorder：反抗挑戦性障害) とCD (Conduct Disorder：素行障害) を合併しているだろうといわれている。

ADHD/ODD重複児は、子どもの問題行動の原因を母親のしつけ方と誤解され、社会的バッシングを受け、家庭内外で母子が孤立しがちになり、結果として養育の劣化を招き、子どもの症状と悪化とのネガティブな相互作用のループに陥りやすい。したがって、子育ての一番近くにいる保育者が理解し、適切な支援を行うことが、二次障害防止の最も有効な手立てとなる。

## 2. 二次障害を防ぐために

### (1) ADHDはひとつの特性と捉える

ADHD児の問題視される行動は、自己のコン

トロールのしにくさから引き起こされる。しかしながら、障がいそのもの (Impairment) が見えないため、周囲の大人は、理解不足から、障がいによって生じる困難性 (Disability) をパーソナリティ問題に起因してしまいがちになる。

その結果、その時期に培っておきたい対人関係や日常生活行動といったさまざまな社会生活スキルを獲得することができず、叱責や放任、またはいじめによる情緒不安定、セルフエスティームの著しい低下といった二次障害を引き起こしてしまうのです。

人は様々な要素のかたまりです。ADHDはその要素のひとつであり、それ以外の様々な個性や特性をもっていると捉えたい。ADHDの部分を消去しようとせず、それ以外の個性や特性を生かし、育てるようにしよう (図1)

### (2) 障害を外在化させる

Impairmentはその子どもの特性のひとつで、なくなることはない。そこから生じるDisabilityはその子だけの問題ではなく、他者との関わりにおいて生じる。そこで、障がいをその子だけの問題とせず、関わる人的環境、物的環境との間に生じる問題と捉えることが前提となる。

例えば、「遊びを持続できない」という特性は、周囲の子どもの遊びが気になったり、遊びの中断により、遊び相手の子どもが不満を持ったり、不快な気持ちになることが障がいとなる。このDisability部分は、かかわり手の工夫次第で、目立たなくすることが可能である。発想が豊かで、お世話好きで、ユーモアのある子だという評価にすることができる。(図2)

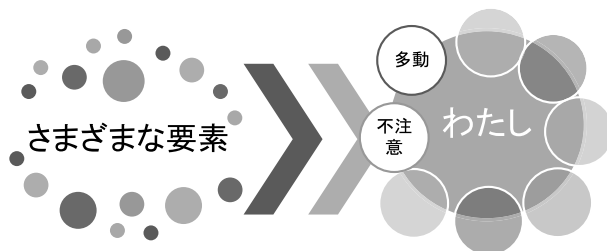


図1 人はさまざまな要素のかたまり

いろんな要素の塊が一人の「ひと」とすると、障がい(Impairment)はその子の一部  
Impairmentを知り、Impairmentから生じるdisabilityに、適切に関わろう！

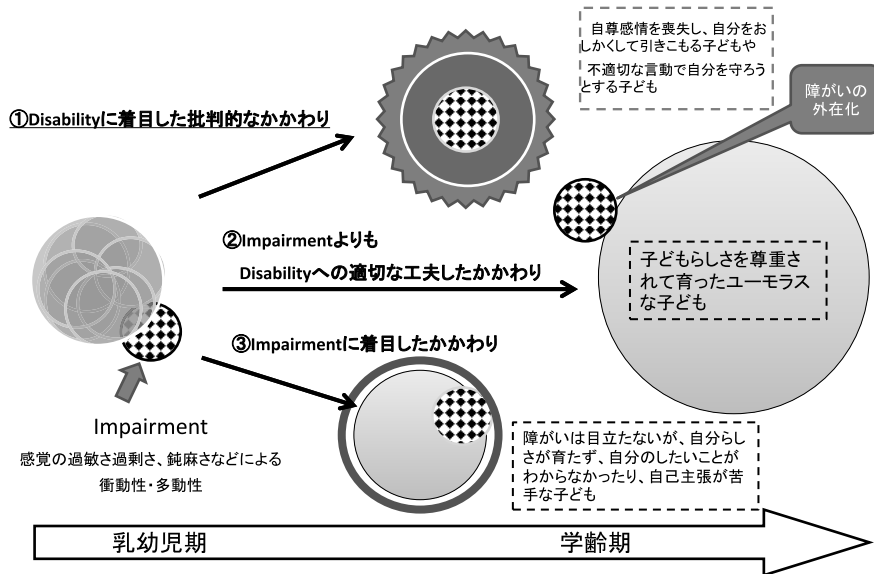


図2 かかわり手の理解が二次障害を防ぐ

### (3) 直接的な工夫あるかかわり

子どもの自尊感情を高める努力は不可欠である。環境を調性して失敗の経験を減らしたい。特に2次障害をふさぐ観点からの工夫は次の通りである。

#### ① 行為の肯定的意図を探ろう

子どもの行為にはすべて「こうしたい」「こうなりたい」という肯定的な意図が隠れている。例えば暴言について考えてみよう。

泣いている子どもがいると、その泣き声を止

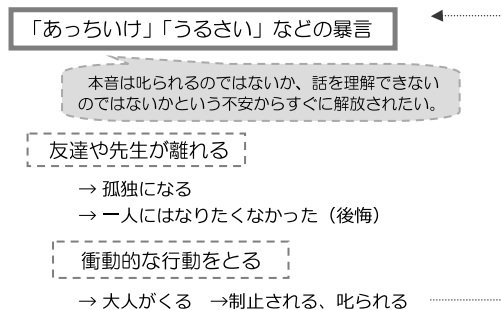


図3 暴言の肯定的意図を考える

めたくて手を上げるという悪循環をして、叱られ、自尊感情を下げていく子どももいる。問題になる行為すべてについて、肯定的意図を探れるようにするには、大人の共感 (sympathy) を超えた子どもの感情への自己移入 (empathy) の力が必要となる。(図3)

#### ② 「問題とされる」行為を「許される」行為に置き換える

ADHD児の多くはよく気が付く子どもである。先生は、自分がどうすればその子に「ありがとう」を言えるのかを考えたい。子どもも、先生や友達の役に立ちたいと願っている。行動を制止するよりも、許される行動に置き換えて「依頼」し、「お礼 (褒賞)」を忘れずに伝えよう。例えば、よくしゃべる子には、朝の会で子どもの人数を数えてもらって報告してもらったり、歌を独唱してもらったりする。

動き回る子には、カーテンをとめてもらったり、カリキュラムの遊びの中にリレーを入れて活躍してもらすることができる。

その子ができること、クラスメートの前で先生に褒められる役割を与えることで、自尊感情が培われる。他の子どもとの不公平感を考える先生もいるが、日常のこのような簡単な配慮こそ、本当の特別支援であろう。また、他の子どもからの孤立による、不登校や乱暴などの問題行動の回避になるどころか、皆が協力するまとまりのあるクラスになる。

また、子どもが二次障害を起こさなければ、年齢が上がるにつれて、問題行動はスタイルを変え、ミニマムになっていく。例えば「走り回る」は「椅子をガタガタさせる」「筆箱をいじる」「鉛筆まわしをする」といった具合である。著者の臨床の経験知から言うならば、9～10歳頃には、多動性はかなり改善される。

### ③お薬の処方

近年は、医師から薬を処方される場合が多くある。お薬を処方される子どもの保護者は、多くが副作用を心配する。そこで、親から子どもに薬が処方されたことを知らされたら、衝動性や不注意が激減したのでよかったと安堵するだけでは意味がない。ADHD特有の偏った実行機能を改善し、かつ育むために、服薬にあわせて、その時期に必要なとされる適切な感覚刺激を与え、対人関係や日常の生活スキルを獲得していきけるような配慮が必要である。

## 3. さいごに

障がいは、生きづらさのある当事者が決して

望んだものではない。

よく考えて見れば、私たちの感覚は生きづらさの域には達しなくとも豊かなレパートリーがあるはずだ。

私にも難聴ではないものの聴覚に不思議さがある。感覚の違いを知るほどに、自分の耳に魅力すら感じられるようになった。

「異なり」に魅力を感じるか、不具合を感じるか、それは他者との体験によって形づくられるものであり、自己理解に任せられるものではないだろう。

他者の感覚を完全にわかりきることはできないが、想像は練習すればほどに深まる。

目の前の子どもが現代社会で生活をする上で不都合な自分の感覚に魅力を感じられるよう、まずは私たちがその子どもの感覚を知ろうとし、その異なる感覚に「なんて素敵でしょう」と、魅力を見出そうではありませんか。

### 【参考文献】

- 榊原洋一．解体する発達障害．比治山大学短期大学部キッズサポートシステムKiss 七木田方美編著．ひととひとのあいだ－健やかな子どもと家庭を支える保育の発展のためにKiss 2011；2012．P. 75－133
- 高橋三郎，大野 裕ほか訳：DSM-IV-TR 精神疾患の分類と診断の手引（新訂版）．医学書院；2003